回想・高校再編成の頃

山城2回　山田祐造

一九四八（昭和二三）年一〇月一五日、京都の公立高校のいわゆる「高校再編成」が実施されたこの日、私たちの山城高校も旧制京都三中の校舎で新しい歴史の第一歩を踏み出すことになった。

地域制によって山城へ来ることになった約一千名の生徒たちは、不安と興味の入り混じった表情で学校へ集まって来た。服装も、帽子や胸の校章もまちまちの、いかにも寄合世帯という感じの生徒たちであった。その中に、数多くの女生徒たちの姿があるのが、男子生徒にとってはまぶしかった。

この高校再編成は、旧制の中学校や女学校をすべてご破算にして、「地域制・綜合制・男女共学制」の三原則に基づいて編成し直そうとするもので、ＧＨＱの強力な「指導」によってあわただしく実施された。その間には旧制のいくつかの学校の校舎が新制中学校に転用され、私たちは、残った校舎で二部授業

などの変則的で不便な授業を受けるという混乱もあった。敗戦の痛手から立ち直ろうとする産みの苦しみの時期であったろうとも言えよう。

再編成の三原則は、いずれも明治以来の大改革であったが、生徒や保護者にとっては、特に「男女共学」への関心が強かった。女生徒をもつ保護者には不安も大きかったようで、保護者会で「男女共学反対」を決議した女学校や、娘を私学の女子校へ転校させた人もあったようである。「男女七歳にして席を同じうせず」と言う教えを受けてきた世代としては無理もないこととも言えよう。

しかし、こうした大人たちの心配をよそに男女共学は予想以上に順調にスタートしたように私は思う。十月十五日

にはじめて顔を合わせてしばらくは、さすがにぎごちない雰囲気もあったが、そのうちに、男女が協力して教室の掃除をするという風景もみられるようになり、クラス運営を積極的にリードする女生徒も現れた。遠足やクラス新聞の発行などを通して、男女がごく自然に打ちとけ合うようになった。フォークダンスなども盛んになった。男女が手をとり合って軽やかに舞う姿を見て、つい四年前まで、同じグラウンドで、配属将校の烈しい怒声のもとに軍事教練を受けていたことを思い出し、深い感慨を覚え、平和を実感したものだった。

私たちが山城高校で過ごしたのは、再編成後の一年半だけである。しかし、振り返ってみると、実に思い出の多い、密度の濃い日々であった。校舎は荒れ、教科書やノートもろくになく、食物も十分でない時代であったが、毎日が実に明るく、楽しかった。

あれから六十年近くの時が流れ、私たちも古希をはるかに越えた。集まると、あの頃のことをなつかしく、誇りをもって語り合う。山城高校も内容、外観ともにすばらしく発展している。その歴史のスタート時に在学し、今も誇りをもって母校を語れるのは嬉しい。